

高梁川 志塾

第1期



目次

02 ご挨拶

- 02 - 「高梁川志塾とは、一体、どんな塾なのか。改めて、考えてみたい。」
高梁川流域学校 代表理事 坂ノ上 博史

04 カリキュラム

06 講座事例（ウェブメディア「倉敷とことこ」より記事抜粋）

- 06 - 高梁川志塾開校式
- 07 - 「SDGsと企業の社会的責任〜クラモクが参画するグローバル教育プログラム〜」
株式会社倉敷木材 代表取締役会長 大久保憲作 氏
- 07 - 「日本の木を使うべき理由〜木工職人から学ぶ森の守り方」
HANAGI 社の工房 代表 佐伯 佳和 氏
- 08 - 「地域密着・巻き込み型の場づくり・拠点づくり」～ 空き家の再生による地域活性化」
一般社団法人moko'a 代表理事 沖村 舞子 氏
- 09 - 修了式

10 インタビュー

- 10 - 菊竹 有希 氏（高梁川志塾 1 期生）
- 12 - 蟻塚 そら 氏（高梁川志塾 1 期生）
- 14 - 鈴木 菜央 氏（高梁川志塾 1 期生）
- 16 - 岡崎 遼太郎 氏（高梁川志塾 クリエイティブ担当）
- 18 - 山本 将徳 氏（高梁川志塾 事務局）

江戸時代、言葉や情報の伝達師は、
備中ではなんでしようか？（神崎宣武）

電気とかガスとか、エネルギーを含めて、
将来的なまちづくりを考えていかなくちやいけないのかなと
今思っています。（古川明）

大原總一郎は、

「美術館は死せる収蔵庫であってはいけない。

生きて成長し続けなければならない」と言葉を残しました。

（大原あかね）

私たちは利息だけでは足らなくて、
元本に手をつけるような生活になった。
それを「持続不可能」と言います。（澁澤寿一）

原体験がどこかにあるはず。（三好祐也）

もうSDGsの先を想像しながら
私たちは新しい目標に向かってやるような時期ではないか、
という風を感じています。（中村泰典）

高梁川志塾とは、

一体、どんな塾なのか。

改めて、考えてみたい。

事業目的を紐解けば、「人口減少社会において
も、将来にわたり持続可能な倉敷市・高梁川流域
とするため、地域の課題解決を実践する人材を育
成する」とある。

キーワード的に言い換えれば、「UDGsを学べる場」
「高梁川の歴史と文化を知ることができる塾」「大
人の探究学習」「ソーシャルビジネスや地域活動を
始めたい人のスクール」「仲間づくりの場」など、様々
に表現できるかもしれない。

第1期を終えて、この「志塾」の有り様を、「安
心してチャレンジできる、豊かな探究学習の場」で
あった、と総括したい。

第1期に学んだ皆さんは、学びながら、次々と
新しい取り組みを自ら、始めていた。

「仲間で大原美術館に行ってみよう。」「オンライン
飲み会を企画しよう！」

「挑戦にはリスクが伴う」とは、よく言われること
だろうが、変化の時代にあつて、求められるのは、
日本が「前の東京オリンピック」以降の高度経済成
長期にあつては、歴史上かつてない人口増加、都市
への集中、経済優先主義であったと、今回の神崎宣
武校長先生の講義から説明されたところであるが、
今年2021年の現状にあつては、いくつもの大きな災
害を経験し（ここ倉敷でも）、そしてコロナ禍に地
球上が見舞われおり、激しい変化の渦に巻き込ま
れていることは、誰の日にも明らかであろう。

私たちのことよりも、
未来の人に何を残すのかってというのが
今日のテーマでもあります。(佐々木博)

半農半工、半農半商、半農半芸。

備中の売薬行商。神楽もそう。(神崎宣武)

課題から入っちゃうと結局「人」のところまで苦勞するというか、
結局継続性がない、それこそ持続可能ではない、っていう
形になるので、取り組む人のエネルギーみたいなもので
変わってくるのかなっていうのは感じます。(松田礼平)

なぜ「地域おこし協力隊」は田舎に行くのか。(藤井裕也)

ラストワンマイルという形で、
サービスが必要とされているひとに
届かない問題があります。(長野紘貴)

誰一人取り残されないということが、
メインになるのかなと今感じています。(井口陽平)

一方、倉敷市が「SDGs未来都市」に選定された
ことの二つに、流域圏での取り組みを、「ダイナミックな提案」「パートナーシップの好事例」として評価されたことは、高梁川流域で活動を続けてきた私たちは、一旦は誇っても良いように思われる。

不確実性の高い未来に向けて、世界共通のゴールであるSDGsをローカルに展開し、地域の持続可能性を高めるために、ごく一部の人のみがチャレンジする状況では難しいように思われる。特別なトレーニングを受けた人、ごく一部の勇氣ある起業家、あるいは「よそもん・若者・バカモノ」だけが挑戦するのではなく、地域に生きる誰もが、安心してそれぞれの生活、つまりは、社会・経済・環境をより良い未来に変えていくために、しなやかな挑戦することができ環境が必要ではないだろうか。

高梁川志塾には、「志」ある方であれば、どんな人でも受け入れる準備がある。「勇氣がある」とは、自ら名乗るものではなく、不安でありながらも、しなやかに状況に応じた生き方を選択し続けることの生き方を見た、周囲が評価をすることだろう。改めて、第1期の講師やスタッフの皆様、何より、受講生の皆様に、感謝と敬意を表します。

そして、このような場づくりの機会を与えてくださった、伊東香織倉敷市長をはじめとして、倉敷市役所のみなさまには、この場を借りて、お礼を申し上げます。

第2期に向けて「高梁川志塾」そのものが、いいものは残し、変化すべきは変える必要があるだろう。高梁川志塾は、古代吉備の国からSDGs未来都市に至る現在まで、変わることなく流れる、高梁川のように、続いていく。そして、変わり続ける。

令和3年3月

高梁川流域学校代表理事 坂ノ上博史



高梁川 TAKAHASHIGAWA 志塾



SDGs 探求コースについて

探究学習とは、受講生自らが課題・テーマを設定し、解決のために情報を収集・整理・分析したり、周囲の人と意見交換・協働したりしながら進めていく学習活動のことです。このコースでは、座学に加えて、実習やプレゼンテーション作成などのアウトプットを前提として、プログラムに参加します。

(探求コース以外に、座学だけに参加する「聴講生コース」もあります。)

プログラム

①開校式(必修) 2020年11月3日(火・祝)午前

②座学(選択) 2020年11月3日(火・祝)～2020年12月20日(日)

高梁川流域の第一線で活躍する豪華講師陣による講座をご用意しています。

※期間中、2時間(前半講義・後半ワーク)×最大40コマ程度(平日夜もしくは土日での開催)

※1コマは、2時間10分を基本的な組み立てとしています。内訳は、1時間のレクチャー、10分の休憩、1時間の質疑応答(もしくはワークショップ)の予定です。

※講師や会場の都合により、2021年1～2月の実施となる講座がある場合があります。

③実習(必修) 2020年11月9日(月)～2021年1月24日(日)

運営側で指定する団体の活動に参加する、又は自身のプランに即した実習／実践を行い、期間中20時間程度の現地実習を行います。

④メンタリング(必修) 2020年11月9日(月)～2021年1月24日(日)

実習の前、中、後で、メンターとの面談を行い、ご自身のプランのブラッシュアップや、最終発表に向けた相談などを行います。

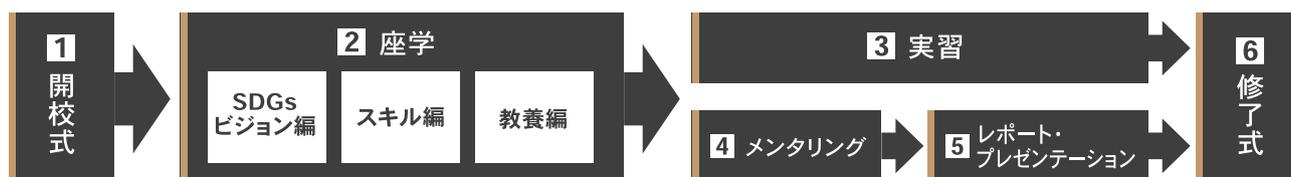
⑤レポート・プレゼンテーション(必修)

2021年1月4日(月)～2021年1月31日(日)

自らのテーマ・関心に合わせて、レポートもしくはプレゼンテーション資料の作成を行います。

⑥修了式(必修) 2021年2月14日(日)終日

それぞれの活動及びレポートもしくはプランについての発表を行います。



座学(講座)の種類

<SDGsビジョン編>

高梁川流域の2030年のビジョンと、そこに向けた課題解決のための現状の取り組みを、実践者や専門家のレクチャーでそれぞれが深く理解し、アクションへの気づきを得ることができる講座。

例)「まちづくりと観光のSDGs～倉敷美観地区が、すでに達成しているゴールとは?～」(NPO法人倉敷町家トラスト 代表理事 中村 泰典氏)。「SDGsと企業の社会的責任～クラモクが参画する岡山大学グローバル教育プログラム～」((株)倉敷木材 代表取締役会長 大久保 憲作氏)ほか。

<教養編>

高梁川流域における、歴史・文化・産業などに関する教養や、活動の前提となる知識を得るための講座。

例)『備中志塾』シリーズ。「吉備と大和～古代の地方と中央の関わり」、「稼ぎと暮らし～備中における半農半X」など。(高梁川流域学校 校長 神崎 宣武氏)。「大原總一郎が夢見た高梁川流域の未来(仮)」(有隣会理事長 大原 あかね氏)ほか。

<スキル編>

プレゼンテーション、ロジックモデル・ビジネスモデル、非営利団体の会計、データ分析(RESAS活用)、ITツールの利活用、オンライン会議の開催方法、ブログやSNSの活用など、団体運営やプロジェクト企画、探求学習のためのスキル・ノウハウを習得する講座。

例)「合意形成のファシリテーションとアイデア発想の手法」(株式会社HackCamp 副代表 矢吹 博和氏)ほか。

修了認定について(取得すべきコマ数など)

SDGs探求コースの修了認定基準は、以下の通りとします。

①必修科目のうち、12コマ以上を履修する。

※必修科目には、必修の座学のほか、「開校式・ガイダンス」「実習(インターンシップ)」「メンタリング」「レポート・プランニング」「報告会(修了式)」の時間を含めます。

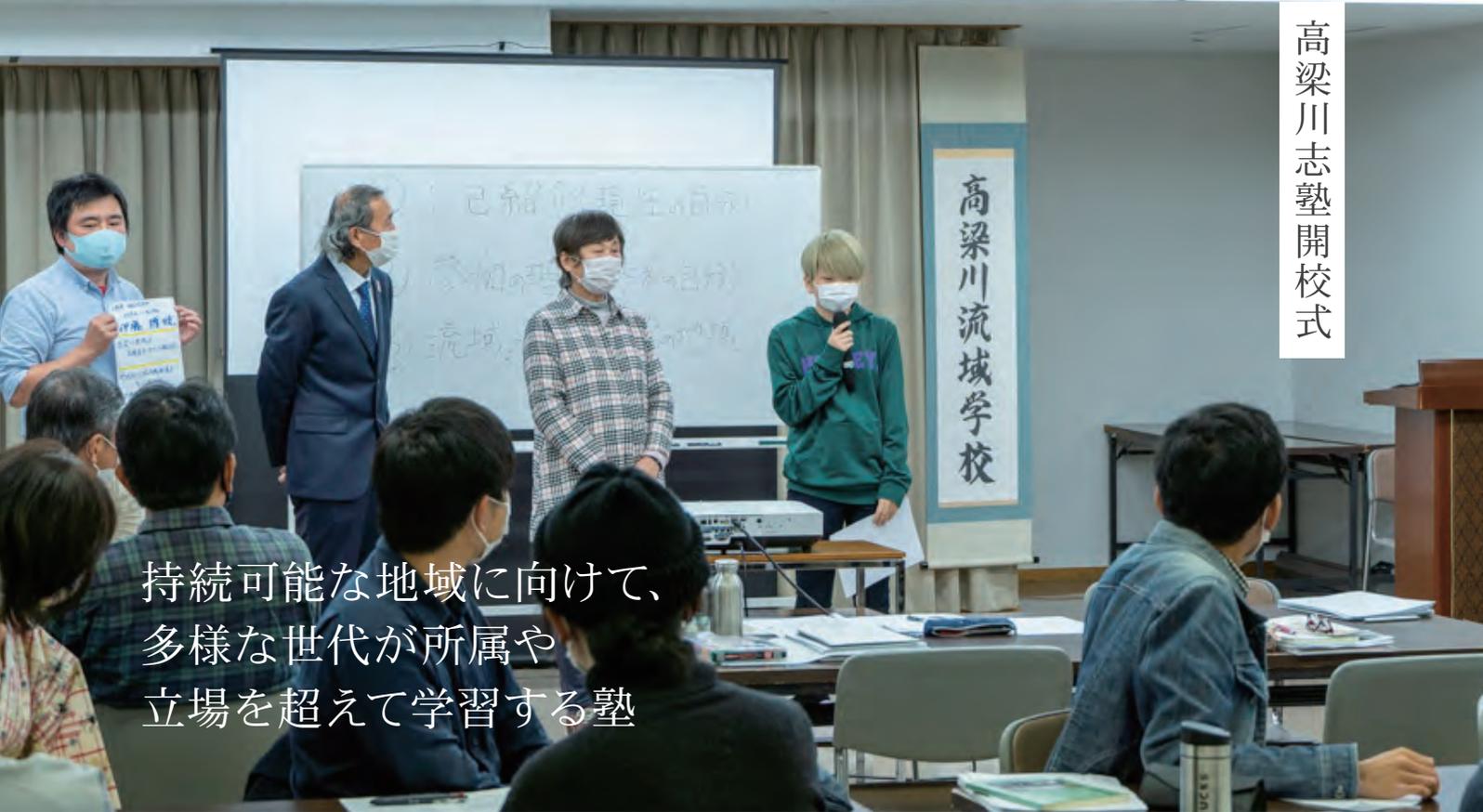
②選択科目のうち、6コマ以上を履修する。

③必修・選択科目を合わせて、28コマ以上を履修する。

④レポートもしくはプレゼンテーションを成果物として、提出する。

1～4のすべてを満たしたものを修了認定します。

高梁川志塾開校式



持続可能な地域に向けて、
多様な世代が所属や
立場を超えて学習する塾

高梁川流域の7市3町を周り、地域おこし協力隊やNPO活動などをするかたがたとの意見交換を重ねてきたとのこと。これらのことを踏まえ、高梁川流域の現状を調べたり、あるいは新たな取り組みを始めようと考えている受講生に対して、「つながりを大事にしてほしい」と語りました。

また、大原孫三郎さんの言葉である「十人のうち七人も八人も賛成するようなら、もうやらない方がいい」という言葉の紹介も。高梁川志塾が、持続可能な地域の未来に向けて、コロナ禍であることも踏まえ世界の価値観が大きく変化している時代に、小さくとも確かな取り組みが生まれるきっかけとなれば、と締めくくりました。

△高梁川流域学校 校長 神崎宣武さんからのメッセージ▽

高梁川志塾、これから始まります。いくつかの講座があるのですが、高梁川流域、備中一円を多様な角度から、見てみようという試みです。古きを辿って、私たちの先祖伝来の文化を継承する講座もあります。

それから、経済、あるいは家並み、それから産物、さまざまな問題を古今にわたって問題提起をする。それを皆様方に一緒に考えていただく。それが今、大事な時代になりました。

なぜ大事か、というと、前の東京オリンピック、昭和39年のあたりから、経済の高度成長が始まります。経済の高度成長というは、私たちはその便利さというのを享受しているわけで、それを批判するわけにはいきません。しかし、一方で都市化、しかもそれが全国に

均一化して、過疎の村落が出てきます。都市へ人口が集中して、しかし、都市そのものの文化的な力も後退していきます。

経済に偏るといえるのは、必ずしも悪いことではありませんが、一方で、文化をどのように伝えるか。文化というのは、その土地、あるいはその職能集団、その持つ「クセ」のようなものです。決して消されるものではなくて、先祖伝来、それが続いている。それが大きな民族社会のクセになると、日本文化になる。その日本文化を語る人も限られている。ましてや、過疎を伴った地方それぞれの固有の文化を語る人も少なくなっている。それを今ここで、高梁川志塾で、もう一度、私たちの故郷を検証してみようという試みでありますから、どうぞ、よろしくご協力のほど、お願いいたします。(動画メッセージより書き起こし)





SDGsと企業の社会的責任

～クラモクが参画するグローバル教育プログラム～

大久保憲作 氏

株式会社倉敷木材 代表取締役会長

講師の大久保憲作さんは、高梁川志塾を運営する「一般社団法人高梁川流域学校」の前代表理事でもあり、数多くの市民活動に携わっています。「企業人との比率は五分五分かな」と語っていますが、企業活動を通して社会と接してきました。2003年から10年続いた「GREEN DAY」の活動などを経て、一般社団法人高梁川流域学校を設立しました。大原總一郎氏が起草した「高梁川流域連盟趣意書」をバイブルとし、流域の風土（自然・文化・歴史）を尊重し、次世代に継承するための仕組みを作ることを目的としています。従来このような活動は、市民運動として行われ、企業活動はその対極にあることが多かったそうです。しかし、現在は企業が地域課題に本気で向き合おうべき時代が来ていると、大久保さんは考えます。

地域なくして企業の存続はないと強い口調で語っていたのが印象的でした。流域という中規模なエリアを見渡し、地域分散の多様性から地域課題解決を目標とする企業行動が求められていると、大久保さんは語りました。20世紀までの社会は「会社を中心」の社会でした。その結果、家事・育児・地域活動は後回しにされ、一部の子どもだけが参加するものになります。しかし人口減少社会になり、ひと・会社・社会の関係は変化しました。真の「社会人」となるためには、「会社人」だけでは不十分なのです。

企業の経済的責任にもなうサービシスや利益提供、企業の社会的責任（CSR）としての地域貢献活動、これらに加えて、企業には個人と会社以外（家族を含む社会全体）をつなぐ責任も求められています。こうすることで、個人が社会の一員となり、真の「社会人」となると考え、クラモク（倉敷木材株式会社）において「行動規範」として制定したそうです。



『日本の木を使うべき理由』

～木工職人から学ぶ森の守り方

佐伯 佳和 氏

HANAGI 社の工房 代表

講師の佐伯佳和さんは、愛媛県今治市出身。幼い頃は自然に囲まれた環境で育ったそうです。岡山県には、大学に進学するタイミングで来ました。法学部に籍を置き学業に励んでいましたが、大学生生活にうまく馴染むことができず、自分の居場所を見失っていたそうです。

講義のなかでは「学生時代、自分は価値のない人間だと思っていた」と言葉にしていました。しかし落ち込んだ生活のなかでも、佐伯さんは自分が活躍できる場所を見つけることができたそうです。きっかけは林業ボランティア。伝統工芸である木工製品の後継者が少ないことを知ったそうです。自然とともに過ごしてきた小さい頃の経験があり、ものづくりが好きだった佐伯さんは木工職人を目指そうと思いを立ちました。

大学卒業後は木工職人として修業するだけでなく、さまざまな経験をしたほうがよいと考え、新見市の地域おこし協力隊へ。木材工房で働きながら林業について学びました。

林業に関わっていない人が、日本の森のためにできることを佐伯さんは教えてくれました。

それは地元の木を使うことです。例えば、地元の木を利用した家具を購入するとしましょう。すると「木を切る人↓木を加工する人↓家具を作る人↓家具を使う人」へ、ものの流れが生まれ、お金と仕事も循環します。地域経済が活発になることで、林業に関わる人の生活や仕事の手助けになると話してくれました。工業製品にもメリットがあり、もちろん私たちの生活を支える欠かせない素材です。

一方で、木材も製造過程で生まれる二酸化炭素の排出量が少なく、土に帰るという素晴らしい特徴があります。木材の持つ魅力が見直されて、もっと利用されてほしいと佐伯さんは話していました。



『地域密着・巻き込み型の場づくり・拠点づくり』

～ 空き家の再生による地域活性化

沖村舞子 氏

一般社団法人 moko'a 代表理事

沖村さんの第一印象は「元気」でした。いきいきと話す姿を見ると、沖村さんのエネルギーが伝わってきます。経歴を聞くと、ハツラツとした性格の理由がよく分かりました。生まれは栃木県で、育ちは北海道。高校生のときに、居住困難な狭床住宅などをリフォームするテレビ番組に出てきた建築模型を見て「私もこれを作りたい!」と思い、東京都八王子市にある建築の専門学校に進学します。専門学校で学んだ後は、東京理科大学の夜間学部に入。昼は構造事務所でアルバイトして、夜は大学に通う生活を続けていました。

沖村さんはアルバイトがきっかけで、コンゴ民主共和国の首都キンシャサで小学校を作るプロジェクトに参加します。日本の大学生が現地に赴き、建築関係の学生が校舎の建造を、教育関係の学生が授業の立案をするという内容でした。校舎の建造には、現地の素材、現地の技術を活用。構造事務所での仕事の経験があった沖村さんは、日本で釘やボルトなどの外国由来の技術が多く使われていることに疑問を覚えたそうです。

新しい土地で自分の居場所をつくりたいと感じた沖村さんは、地域おこし協力隊へ。「星と海のまち」というキャッチフレーズが目止まり、2016年に浅口市に移り住みました。

着任当初から、多くの場所に顔を出して地域の人に顔を覚えてもらう努力をしました。南京玉すだれを習得したことで敬老会に招かれることが増えて、年配のかたと交流する機会もたくさん得られたそうです。

地域おこし協力隊として活動しながら、2017年5月に一般社団法人 moko'a (モコア) を設立。「moko」は「コンゴ」の言語であるリンガラ

語で「1」を意味しており、「a」は浅口を表していると教えてくれました。

沖村さんは地域おこし協力隊の任期を終えたあとも、団体を通じて地域を支える活動を続けています。

■空き家を活用した地域活性化

浅口市金光町は金光教本部の門前町として栄えた歴史があり、レトロな雰囲気の内並みを残しています。しかし、人影が少ない街は閑散としており寂しい雰囲気。

沖村さんは地域を活性化しようと、以下のような浅口市金光町の空き家活用にも取り組んでいます。空き家の活用事例として、「スペース金正館(きんせいいかん)」を紹介してもらいました。改修は地域住民を巻き込んで体験ワークショップという形式で開催。宮大工、建築士、左官職人を招いて指導してもらいながら地域住民と一緒に改修しました。改修後の運用方法についても、住民たちと考えたそうです。

そして、取り壊される予定だった空き店舗は、レンタルスペースへと変身。カフェ営業、ワークショップ、勉強会、コミュニティ活動など、地域住民が交流する施設として生まれ変わりました。地域住民が集まるだけでなく、街の外からもイベントを開催する人が訪れるため、外部の人との交流の場所にもなっているそうです。

「スペース金正館」の改修では、店舗の照明が初めて点灯したときに大きな変化がありました。明るくオシャレになった店内を見て、地域の人は大喜び。積極的に活動に関わってくれる人が増えていきました。

言葉にするだけでは伝わらないことがたくさんあるので、実際に体験してもらおうことが大切です。特に今回の講座で印象的だったことが2

つありました。

■「いいいな」データ整理、調査

ひとつは、「データ整理や調査をいいいなにやっていることです。人前になるときは笑顔を忘れない沖村さんですが、人口減少という社会問題を理解するために資料の研究やセミナーへの参加など地道な努力も続けています。

人口統計データや空き家情報の可視化は、関係者に向けて課題を明確に説明し、事業を提案するための手段だと話していました。

また、プロジェクトを実施する前には、役所や地域住民に綿密なヒアリングを実施して課題を整理したのちに、具体的な計画を立てています。

沖村さんの明るい人柄は、地域の人を巻き込みながら活動できた大きな要素です。さらに、データや調査事実に基づいて分かりやすく説明できる能力も、多くの人が沖村さんを信頼する理由だと感じました。

■主役は地域の人たち

もうひとつは、主役は地域の人たちだということ。考えを徹底していることです。

地域社会の持続性を考えたら、地域おこし協力隊ではなく、地域住民が主体となって事業が進む必要があります。地域おこし協力隊は裏方で、地域が盛り上がるきっかけを与えることが使命。

沖村さんが手がけた事業には地域の人が関わられる仕掛けが多くあり、地域活性化のきっかけを作ろうとする意思が強く感じられました。

自治体SDGsモデル事業
「高梁川志塾」成果発表会・修了式





流域に生きる人や自分を知る第一歩を踏める場所

菊竹 有希 (高梁川志塾1期生)

インタビュー 山口 百香

高梁川志塾に第1期生として参加した菊竹有希さん。普段は岡山県環境保全事業団で設備管理の仕事と、街のゴミ拾いをするボランティア「グリーンバード岡山チーム」の三代目代表をしています。2020年11月から翌年2月までの3か月間行われた高梁川志塾で菊竹さんは何を感じ、どのような変化があったかお話を聞きました。

高梁川志塾の塾生として参加したことが、高梁川流域学校との初めての関わりだったと菊竹さんは話します。それまでは「高梁川流域学校」の名前も知らず、「高梁川流域」という言葉もあまり意識したことはなかったそうです。

菊竹さんが高梁川志塾に参加しようと思った理由は、グリーンバード初代代表の松原龍之さんから「面白いことがあるんだけどやってみないかと誘われたことがきっかけでした。」

松原さんから高梁川志塾について話を聞いていくうちに「面白いことならやってみよう」「この塾を通して自分の中で何か目標が見つければ」と思い、菊竹さんは参加を決めます。

菊竹さんは高梁川志塾に初めて参加したとき、集っている人たちを見て年齢層も職業もバラバラだなあと思いました。また同時に、高梁川流域学校代表理事の坂ノ上さんのお話に「多様性」という言葉を改めて意識しました。

講義を通して普段何気なく生活している高梁川流域の中に、様々な価値観をもつ人たちが生きていることを初めて実感したとのこと。

高梁川流域の歴史などを深く知ること、自分が住んでいる街のイメージが具体的に想像でき、菊竹さんの中にある高梁川流域への興味もどんどん広がっていきました。興味がない分野について、他の塾生や講師が楽しそうに話しているのを聞いているうちに、「意外と面白いんだな」

と思いい、もっと学びたいという意欲が湧きはじめたそうです。

菊竹さんは、地域おこし協力隊についての講義を聞く前まで、地域おこし協力隊の人々が自分とは全く違う存在に思えて興味を持っていなかったそうです。しかし講義で「地域をより良いものにするには、地域の人との関係を丁寧に築くことや思いを大切にすることが大事」という話を聞き、「自分の地域ボランティア活動とも共通する価値観がある」と菊竹さんの今後の取組方針としても参考になったそうです。

講師や塾生の生き方を知るとは、同時に菊竹さんの生き方を考える機会にもなりました。菊竹さんは「こんな生き方の人が流域には居るんだ！」と驚くと同時に、「自分だったら何ができるかな」と考えるようになりました。

菊竹さんは、これからの高梁川流域の持続可能な未来に向けて大事なキーワードは「川」と語ります。

「高梁川流域には年齢、性別、国籍を問わず、様々な人が暮らし、同じ水を使っています。例えば新見や水島で活躍している人などは活動する場所も色々ですが、その人たちが繋がれば新たな川の流れができます。しかし、どんなに大きな川でも上流の水が枯れてしまうと下流には水が届きません。SDGsもみんなが協力しないと達成できないこと。この流れを止めないためには、各々が自分のできる取組みの継続が大事だと思っています」

菊竹さんのお話から、今すぐSDGsの達成は難しくても、今活動している人たちの取組みや思いが途切れないように次世代に伝えていくことの大切さを感じました。

菊竹さんは今後の取組みとして、「地域に

とつての持続可能な未来とは何か」を考え、多様な価値観に触れあえる団体を作りたいと考えています。活動では高梁川流域学校と協力しあったり、何かに挑戦したい人たちを支えたり、または巻き込んでいきながら、お年寄りも子供も気軽に参加できる団体していきたいとのこと。

また、自分が取り組んでいるグリーンボードとも関連付けていきたいと菊竹さんは目を輝かせていました。

菊竹さんのお話の中でも「高梁川志塾は、高梁川流域について学ぶだけでなく、高梁川流域に生きる人や自分を知る第一歩を踏める場所」「多様性のある社会を目指すためには、色々な人に出会い、人を知らなければいけない」という言葉が印象に残っています。

私たちは、自分以外の人の生き方や価値観を知ることで、今まで知らなかった世界を知ります。世界を知ることによって物事を見るときの視点が変わり、新たな社会課題が見つかることもあります。自分にとつては問題と感じなかったことも、別の人は問題として困っている場合があるからです。そして今まで気づかなかった自分の可能性や、新たに取組んでみたいことに気づくことにも繋がります。

高梁川志塾は、様々な人と出会いを通して自分の固まった考えをほぐし、新しい可能性を見つけられる場所なのです。一人ひとりの取組みが繋がって、地域へ、流域全体へと広がっていくことで高梁川流域の持続可能な未来への可能性が開けていくのではないのでしょうか。

菊竹さんの希望にあふれたお話には胸を躍らせながら、自分だったら高梁川流域で何ができるだろうかと思いを馳せていました。

菊竹 有希

高梁川志塾第1期生。街をキレイに、ポイ捨てしない街にするためにゴミ拾いをしているグリーンボードおかやまちームのリーダー。志塾を卒業後の現在、ゴミ拾いだけでなく新たな活動を模索中。



COMMENT

世界には、多様な価値観がある。誰もが知っている。それに触れ、摩擦を起こし、異なるものと時間を共にすることで、多様性の中に生きることを知る。一步を踏み出した者だけが、体得する領域がある。水は流れる。同様に誰もが知っている。菊竹さんは、新しい支流となり、人と時間を紡いでいく人になると期待している。

—— 高梁川流域学校 監事 松原 龍之

目指すこと

社会全体の学びの場づくり

多様性を認め合える社会に近づく

くらがくの展開（次世代まで続くまなびの場）



人の輪をつくる 高梁川流域学校

蟻塚 そら(高梁川志塾1期生)

インタビュー 小銭 理江

2021年2月28日、高梁川流域ライター塾の講義の一環として、高梁川志塾受講生の蟻塚そらさんにインタビューしました。

彼女は岡山大学文学部に通う1年生です。フィールドワークや座学など、高梁川流域にまつわる様々なことを学んでこられました。蟻塚さんが高梁川流域学校に関わるきっかけは、2020年の夏に行われた水島パーキングデーというイベントです。

岡山大学では、元々SDGsの取り組みに力を入れており、講義の一環として参加しました。イベントを主催・運営しているスタッフと知り合いになり、高梁川志塾について教えてもらったことで高梁川流域学校に関わるようになったのです。

高梁川流域学校に参加するまで、川の流域を見たことがなかったのだとか。高梁川流域学校に関わったことで、〇〇市とか〇〇町といった地図上の区切りではなく、川の流域から地域を見る、新しい視点でのモノの見方を知り面白かったそうです。

また自分にはない発想を持つ人や、面白いことをやっている人など、様々な人との出会いも魅力だったと言います。

蟻塚さんは川と海の境目を知識として知ってはいましたが、高梁川流域学校に関わることで、境目はなく繋がっていると感じられるようになったそう。身近にある「地域」という言葉の捉え方が変化し、今までは遠いと感じていた車で1〜2時間かかるような場所も、「流域」というくくりのなかで身近になったと振り返ります。どこか他人事で遠い存在だった「地域」が、実際に自分の足で現地へ赴き見聞きすることで自分の血肉となり、身近で自分事と

して捉えられるようになったことが伝わってきました。

キーワードは「人との繋がりに」と話す蟻塚さん。高梁川志塾受講生になったことで、大学に行くだけでは出会えないような様々な年齢や立場の人と知り合い、繋がるきっかけができました。結果、蟻塚さん自身が1年前には想像もしていなかったような経験へと繋がります。例えば高校生・大学生、若者と企業が一緒になって地域の在り方を考えるシンポジウムにパネリストとして登壇する、倉敷とことこのライターとして記事を執筆するなどです。人との繋がりがあつたからこそ、チャレンジ出来る機会に恵まれたと語ります。

蟻塚さんにとって高梁川流域学校での経験は、ステップアップに向けた大きな1歩となったのではないのでしょうか。最前線で活躍している人たちも、きつと過去に人との出会いや繋がりがきっかけとなり、現在に至るのだと思います。想いは脈々と受け継がれて、未来を作っていくのだと感じました。

蟻塚さんにとって高梁川流域学校は人の輪を作るところ、川で例えるなら源流のイメージなのだそう。源流から枝分かれしながら広がっていき、自分が思ってもみなかったところまで行ける、どこまでも広くて自由な場所に、自分も入っていききたいと楽しそうに話していました。

蟻塚さん自身も始めは大学の講義から水島パーキングデー、高梁川志塾や高梁川流域学校、倉敷とことこのライター、シンポジウムパネリストへと源流が枝分かれし、広く大きくなって様々な経験を積んでいます。

アフリカのことわざ「早く行きたいなら一人で、遅くへ行きたいならみんなで行け」(If You Want

To Go Fast, Go Alone. If You Want To Go Far, Go Together)が好きな蟻塚さん。

誰か1人のリーダーが頑張るのではなく、みんなで協力して高梁川流域の川の一番下から上までをハード面とソフト面を繋げていくような活動を、みんなの中のひとりとして全力でやっていきたいと意気込みを語ってくれました。また、現在活動している倉敷とことこのライターやイベント運営も、できる限り続けていきたいと。エネルギーギッシュに色々なことにチャレンジしてみようとしている蟻塚さんが、これからどんなふうに高梁川流域に新しい風を呼び込むのか楽しみですね！

蟻塚さんの話を聞いて「高梁川流域学校は人の輪をつくる」という言葉が印象的でした。人との出会いや、つながりがきっかけで「私もこうなりたい」「こんなことがやってみたい」と、新しい道しるべが見つかるともあるので、縁とは本当に大事なものだと思います。

高梁川流域学校が人の輪を作るところなら、そこへ思い切つて飛び込み、人の輪の中で学ぶことで自分の可能性が拡がり、自分にも何か出来ることはないかと考えるようになるでしょう。

彼女の経験の様子から、川の源流みたいに最初は細く小さかったものが、少しずつ広がっていき、大きなものへと変化していつていることが見て取れます。高梁川流域学校とは人を育て、地域を好きになる、地域で活躍する人を増やしていく場所だということがよく分かりました。地域やつながりを大事にする人が増えることで、未来はワクワクするような面白いことが生まれるかもしれません。

SDGsな未来とは決して難しいものではなく、心が弾むような未来が待ち遠しい気持ちになるものではないでしょうか。

蟻塚 そら

岡山大学文学部人文学科1年。
趣味は執筆、カメラ、ドラム。高梁川志塾への参加をきっかけに、現在、noteに『地元を舞台に小説書いてみた。』を掲載。



COMMENT

「パーキングデー」を通じて知り合った蟻塚さん。感性の鋭さに加え、ものごとの要点を理解しまとめ上げる能力、積極的にチャレンジする前向きな姿勢に、心惹かれました。先日の水島でのシンポジウムではパネリストとして「行動することで、自分が変わっていくのがわかる」と発言され、彼女の成長を強く感じました。更なる成長に期待しています。

高梁川流域学校 理事 古川 明

「書く」こと、とは

- 地域を見つめること
- ・ いいところも、悪いところも見える
- 地域を「自分ごと」にすること
- ・ 地域の未来を想像できる

→「書く」より「考える」が目的



持続可能な未来は人と 人が協働することが大切

鈴木 菜央(高梁川志塾 1 期生)

インタビュー 寺元 静香

「高梁川流域」と聞いてピンとくる方は、どのくらいいるでしょうか。私たちが暮らす町に流れる高梁川。川の流域を中心に生まれた風土や歴史、文化を学び、問いを持ちながら考え継承していくことは、持続可能な社会を作る第一歩なのかもしれません。

高梁川志塾 1 期生として高梁川流域学校に関わった鈴木菜央さん。奈良県出身の鈴木さんは 2020 年 11 月の転職を機に岡山県へ移住し、2 週間後には高梁川志塾に参加したそうです。

移住生活と同時にスタートした高梁川志塾での時間は、鈴木さんにとって新しい土地に暮らす人たちと出会い、関わる良い機会だったことでしょう。高梁川志塾は、鈴木さんにどのような景色を見せてくれたのでしょうか。そして、鈴木さんはどのようなことを感じ、受け止めたのでしょうか。

鈴木さんが高梁川志塾に参加したきっかけは、職場の上司の紹介からだったそうです。もともと地域作りや、SDGs というキーワードに関心を持っていた鈴木さん。新しい環境である地域のことを知るきっかけになると思い、参加を決めたと話してくれました。

移住したばかりで右も左も分からないときに新しい環境で生活することは、働くことだけでも十分大変だったと思います。しかし、自ら新しい土地に関わろうとする鈴木さんの姿に魅力を感じました。鈴木さんは高梁川志塾に参加して、初めて「高梁川流域」の存在を知ったそうです。

川について地理的な意味で理解はしていたものの、川の流域という概念はなかったと鈴木さんは話します。地域の数え方として流域という考え方を知り、とても新鮮だったと語ってくれました。

文明は川があるところで発展し、人々の暮らしに影響を与えてきました。流域という単位で、風土や歴史、文化を見つめることは理にかなっており、新しく面白い視点だと鈴木さんは感じました。持続可能な地域を目指す高梁川志塾の講義内容に、「地域の歴史や文化」に偏っている印象を受けた鈴木さん。SDGsが掲げる17つの目標にあるような「ジェンダー」や「貧困」など、もう少し幅広い話題について語り合うことが出来れば、もっと充実していたかもしれないと鈴木さんは話します。

また、現場に足を運ぶことが少ない「屋内での学び」の限界と同時に、フィールドワークを通して高梁川流域の問題を実際に自分の眼で見ることの重要性を感じたそうです。移住してきたばかりの鈴木さんにとって「水島」地区がどの辺りなのかぼんやりしており、実際に足を運んだこともなかったと言います。

「水島に行ったことが無い人間が、水島の課題について話を聞いても意味がない」と、移住して間もない鈴木さんだからこそその視点を聞きました。鈴木さんは、持続可能な未来には人と人が「協働していくこと」が大切だと語ります。人と人が協力し合わないとよりよい未来や、新しい文化は築けません。

しかし、一人ひとりが抱く思いや価値観、そして理想とする未来は決して同じとも限らない。人と人が協働し合うことは、とても難しいことです。思いや価値観が違う中で、いかに同じ方向に進むか、仲間づくりやモチベーションを固めていくことが、協働していく中で大事だと語ってくれました。高梁川志塾で出会った仲間たち、同じ志を持った者だけが何かしようとしても、高梁川流域の未来を変えることは出来ません。たくさんの方の人口がいる中、多くの人を巻き込

む力や動きが必要です。終始柔らかい口調で話す鈴木さんですが、所々で「まずは人でしょ」と話される姿に、鈴木さんの強い思いを感じました。

鈴木さんは、高梁川志塾を卒業したあとも同窓生たちと新しい取り組みに挑みたいと話してくれました。それぞれ暮らしがあり、学業や仕事といった本業があります。本業がある中、違うフィールドで活動することは正直大変なことです。

「自分さえよければ良い」のではなく、自分の暮らしのちよつとした時間を社会のために使えるようになること、よりよい社会を作れるのではないかと鈴木さんは語ってくれました。

移住と同時に高梁川志塾に参加し、自ら新しい土地に関わりとう動き出した鈴木さんだからこそその言葉に説得力を感じました。

高梁川流域学校には岡山県在住の方もいれば、Uターンの方、県外から移住してきた方など、さまざまな背景を持った人が関わっています。「高梁川流域」という言葉ひとつでも、様々な受け取り方や考え方が存在するでしょう。

立場や年齢を越えて「高梁川流域」というキーワードを中心に学び関わり合うことは、お互いの考え方やキャラクターといった多様性を受け止めあう場としても機能していたのではないのでしょうか。

不確実な社会、自然や歴史、文化を育て継承していくためには、人と人が関わりあうことが大切です。何かを感じ受け止め合いながら変わっていく柔軟な人の変化こそ、持続可能な社会をつくる未来の姿のように感じました。

鈴木 菜央

関西出身。九州・関東を経て、昨年の秋から中国地方へ。いつも心は関西にあり。町家を通じたまちづくりに挑戦しながら、持続可能な暮らしを模索中。異国、芸術、自然が大好き。

COMMENT

鈴木さんは人との出会いを大切にしているようです。様々な会合やイベントそして事務所の訪問者と次々にコミュニケーションとネットワークを広げています。まちづくりの裾野は広い。偶然の出会いを大切に。出会いが幸せなコミュニケーションをつくり、素敵な場が作れるように精進してください。期待しています。

—— 高梁川流域学校 副代表理事 中村 泰典

『快適さ』の背景

町家居住歴：0年
出来るようになったこと：
「ガラス窓の拭き方」「暖簾のかけ方」
「掛け時計の時刻調整の仕方」
▼
町家に「住む」ことに対する抵抗
#手入れが大変 #害虫でそう #不便 etc

→ 住居として快適だと感じられる
仕組みづくりを



『町家暮らし体験の場』の背景

「町家deクラス」で感じた物足りなさ

主なプログラム内容は生活文化体験
町家滞在時間は、長くても2~3時間
▼
「生活の場」としての町家の良さを
理解してもらうのは難しい……
でも町家に居住してくれる人を増やしたい

→ 「実際に町家暮らしをしてみる」
体験を通して広めたい





高梁川の流れるように 自然に生まれた感情

岡崎 遼太郎(高梁川志塾 クリエイティブ担当)

インタビュー 奥田 裕子

2020年11月より3か月に渡って行われた「高梁川志塾」。高梁川志塾のスタッフとして、ウェブサイトの制作や冊子のデザインを担当したのが、高梁川流域学校の運営に携わる岡崎遼太郎さんです。岡崎さんの本業は「デザイナー」。デザイナーの仕事しながら、地域教育の活動拠点である高梁川流域学校の運営にも関わっています。まさに「意識高い系」といわれる特別な人のように感じます。しかし岡崎さんと高梁川流域学校との出会いは、高梁川の流れるように自然で、特別なものではありませんでした。高梁川流域に住んでいる岡崎さんが、どんなきっかけで高梁川流域学校と出会い、馴染んでいったのか、そして流れに乗った岡崎さんはどう変わっていったのでしょうか。

岡崎さんは出身校である倉敷芸術科学大学で非常勤講師もしており、高梁川流域学校が開催する講座で、デザイナーの講師を務めることもあります。大学卒業後も、所属していたゼミの活動を手伝っていた岡崎さん。ゼミの活動を通じて、高梁川マルシェのウェブサイト制作を担当することになり、高梁川流域学校の理事(当時)をしていた坂ノ上博史さんと出会います。

それが縁となり、高梁川流域学校の立ち上げの際に、デザイナーとして倉敷市で働き始めた岡崎さんがチラシのデザインを担当することになりました。

最初のきっかけは、「自ら進んで」ではなく「人にすすめられて」という流れだったとのこと。信念を持ち、高梁川流域学校で積極的に活動している人を見て、自分には「ハードルが高い場所」と感じることもあったそうです。

デザイナーの仕事を通して関わっていく中で、高梁川流域学校が行っている活動を徐々に理解できるようになった岡崎さん。少しずつ意識が変

わつていきます。

それまでは高梁川流域について考えたことも意識したこともありませんでした。しかし高梁川周辺には様々な地域があり、川を中心として文化や産業が生まれていることを知ります。

岡崎さんは高梁川流域に対して、決して「無関心だった」わけではありません。知らなかったからこそ、「知りたい」という気持ちが生まれていなかったのです。

高梁川流域学校との出会いは、岡崎さんに「知るきっかけ」を与えてくれました。今まで意識していなかった高梁川流域に対して「もっと知りたい」という気持ちが生まれていきます。

地域で活動している人やイベント、新しく生まれた商品など自ら調べるほど、高梁川流域は岡崎さんの中で「気になる存在」に変わっていきます。

それはまるで、高梁川の流れのように自然に生まれた感情でした。

「今の価値観や文化がこの先もずっと変わらないか」というと、きっとそうではないと思います」と岡崎さんは語ります。

時代と共に変化していく価値観。自分を変えず自分の価値観だけで物事を見続けていると、いつか時代と自分がずれていく時が来ると考えているそうです。

「変わっていく価値観や文化を意識して、常に自分自身を変化させることが、高梁川流域の未来に必要なと強く意識していることを感じました。」

「自分を変える」のは簡単なようで難しいことです。「最近の若者は…」という言葉にもあるように、年齢を重ねるにつれて自分の価値観で周りを見る場面は増えていくように思います。

岡崎さんは、時代を変えていく10代・20代の若い世代とのコミュニケーションを積極的に行うことで、新しい価値観や文化を知るきっかけを作り、

自分自身を成長させているそうです。

岡崎さん自身が最初の出会いで感じていたように、高梁川流域学校に対して「ハードルが高い場所」と感じる方はいらっしゃるのではないのでしょうか。実際、私もその一人でした。理由としては「何も知らなかったから」です。

「人が変わる『きっかけ』を作りたい」と岡崎さんは言います。高梁川流域学校を知る「きっかけ」であるウェブサイトを冊子を作るうえで、岡崎さんが心がけていることについても具体的に教えてくださいました。

まず自分自身が関わって理解できたことを、初めての人にも分かりやすい表現で伝えること。

文字ばかりでは硬くなるので、親しみやすいイメージが持てるように文章構成や色合い、余白などデザインを工夫していること。細かい心配りに「たくさんの人に高梁川流域学校を知ってもらいたい」という情熱を感じました。

人と人との繋がりができ新しい人の輪を広げている岡崎さん。高梁川流域が繋いでくれた人の輪を大切に、今度は自分自身が人と人とを繋げていける存在になりたいとのこと。

「みんなちがって、みんないい」

岡崎さんと話している中で、頭に浮かんだ言葉です。「高い志をもって、意識が高い人なのだろうな」と思っていた印象は、話していくうちに変わっていきます。

岡崎さんと高梁川流域学校との出会いがとてもし自然で、特別ではなかったことを知り、「高梁川流域学校は、誰にでも行ける身近な場所」という思いが私の中に生まれました。

「知る」ことで変わる未来があります。高梁川流域の未来を「高梁川流域学校」とともに考えてみませんか。

岡崎 遼太郎

1988年高知県出身。

デザイナー。新たな「日常」をテーマに県内外ジャンルを問わず活動中。岡山で生きる人やクリエイターを紹介するフリーペーパー「STAR*」編集長。

COMMENT

岡崎遼太郎さんは、地域系活動に理解があり、かつ「LAID-BACK DESIGN (レイドバックデザイン)」というチームで活動する珍しいデザイナーです。「裏方」とみられがちなデザイン分野において、個人のデザイナーとしてはもちろん、フリーペーパー「STAR*」など情報発信活動においても飛躍が期待されます。

——— 高梁川流域学校 理事 戸井 健吾





深く広いネットワークを 創出し文化を繋ぐ

山本 将徳 (高梁川志塾 事務局)

インタビュー 小溝 朱里

2020年11月に高梁川流域学校の第6期プログラムとして、「高梁川志塾」が開講されました。新たにスタートした事業運営のキーパーソンは、高梁川流域学校事務局の山本将徳さんです。プログラムに関わるすべての人と、対話を重ねてきた山本さん。初年度を終えた今だからこそ感じる志塾への思いや、高梁川流域の今後について聞きました。

事務局の仕事は、多岐に渡ります。いわゆる「事務」という言葉で想像しやすい、塾生情報の管理や講座の連絡などはもちろん、加えて力を入れたのは、一人ひとりの塾生のサポートだったそうです。それぞれとコミュニケーションを取りながら、どうしたら目標に向かって活動を進められるのかを一緒に考えていました。

志塾は塾生二人ひとりの関心に合わせて、フィールドワークをして発表する場である点が最大の特徴です。座学だけでなく、それぞれの自主性を尊重し、行動を起こした先にある学びを大切にしていきます。参加者全員がやりがいを持って完走するためには、塾生のサポートが必要不可欠。志塾運営のバックオフィス業務だけでなく、参加者のバックアップもすべてに関わっていたのが山本さんだったのです。

事務局の運営に携わったきっかけは、高梁川流域学校代表の坂ノ上博史さんに誘われたからでした。山本さんは大学時代から「地域作り」に関心を持っていたようで、その理由は「面白い大人がいたから」と話します。

「面白い大人」のひとりが、坂ノ上さんでした。偶然にも当時、坂ノ上さんが行なっていた社会事業家を育てる塾に通っていた山本さん。

生徒兼運営になったことで、地域をフィールド

にしたネットワーク作りに取り組むようになり
ました。山本さんが何社かで働くなかで、高梁川
流域の地域作りに携わったこともあったそうです。
これまでは、外の立場で高梁川流域に関わってい
ましたが、志塾が始まるタイミングで正式に事
務局の仕事をするようになりました。

高梁川流域学校のなかの人になった山本さん。
事務局として感じたことを聞くと、「日を重ねる
ことに塾生をサポートしたい思いが強くなった」
とのこと。背景には、新型コロナウイルス感染症
拡大の影響がありました。緊急事態宣言などを
考慮した結果、志塾の開講は当初の予定より先
送りにせざるを得なかったそうです。スケジュー
ルの変更によって、2時間の内容を1日で4コマ
実施し、8時間座学だった日もあったと振り返り
ます。

インタビューをしていると、山本さんの口から
は塾生の気持ちを想像する温かい言葉が出てき
ました。
「もちろん、講師とのスケジュール調整には苦勞し
ましたが、参加していた塾生はもっと大変だった
はず」

一人ひとりのビジョンに寄り添う山本さんの姿
は、塾生にとってもモチベーションになっていたこ
とでしょう。初年度を終えて、高梁川流域への思
いの変化を聞くと、「高梁川流域には、高い熱量
を持って活動している人がたくさんいるんだと気
がつきました」と話します。事務局にいるからこ
その出会いや対話を通して、山本さん自身も非
常に刺激的な1年でした。事務局は、高梁川流
域学校の理事や志塾の講師、塾生などの思いを
繋ぐポジション。大事なものは、関わる人全員で高
梁川流域を持続可能な地域にしよう！と働きか
けることです。

対話を通して多くの思いに直接触れていた
山本さんは、自分たちの地域に対し高い熱量を
持つ人に出会えたと話します。

「二人ひとりの熱い思いが、地域の面白さになる」
今までも山本さんが感じていたことが、少し
ずつ確信に変わっているようでした。ひとことで
「高梁川流域」といえど、地域によって個性が
あります。各地域の文化を未来に残すためには、
「身体性」がキーワードになると語っていました。
文化に地域差があるのは、単に「もともとの暮
らし方が違うから」だけではありません。

「昔の生活は、今の生活と比べると身体の使い方
がまったく違います。どのように身体の使い方が
違うかは、実際に現地に足を運び、体験しないと
わかりません。50年後、100年後に向けて高梁
川流域を持続可能な地域にしたいと考えたとき、
『身体性』なくして未来は語れないと思います」

初年度はリアルに顔を合わせたり、一緒に活動
したりする機会を作りにくかったので、大切にし
たいキーワードなのでしょう。インタビュー中、真つ
すぐな眼差しで話していた山本さんの様子が印
象的でした。

これからやりたいのは、塾生同士の出会いを未
来に繋げること。初年度の塾生は、自発的にL
INEグループを作ってコミュニケーションを取
るようになったそう。彼らの活動を支えてきた山
本さんにとっては、非常に感慨深い出来事でした。
志塾が2年、3年と続くと、塾生同士のネット
ワークは深く、広くなっていくはず。受講中だけ
ではなく、志塾での縁を未来に繋ぐ後押しもでき
れば、高梁川流域の持続可能な街作りにも繋が
ると信じています。

山本 将徳

1989年岡山県出身。高梁川流
域学校・高梁川プレゼンターレ
事務局。

#まちづくり #働き方 #テレワー
ク #テクノロジー #ミニマル #身
体性 #実は岡山市民です



募集

RECRUITMENT

ボランティアスタッフ

高梁川志塾の企画・運営をサポートしてくださるボラ
ンティアスタッフを募集いたします。

企業・団体

高梁川志塾の中で、企業や団体の抱える課題やテー
マについて、取り扱う「提携プログラム」の実施を希
望される企業や団体を募集いたします。

詳細は「高梁川志塾」ウェブサイトをご覧ください。(https://takahashigawa.or.jp/t-shijuku/)

肌感覚とか、勘・経験・思い込みとかあると思うんですけど、
そういうものと、根拠や客観的なもの合わさった時、
その間にあるのが「あ、そうそう」とか「そうね、そうね」
というのがRESEASかなと思います。(川崎好美)

スモールアクションというのを、

僕ら、大事にしています。(長野紘貴)

この「高梁川流域連盟趣意書」、ユネスコに書いてあることは大切だけれども、
まずやるのは身の回りのことだ、というのは趣意書の最初に書いてあります。
これはSDGsの中で、じゃあ私たちが何をやるの、というのと全く同じだ
と思っております。(大原あかね)

常に、テクノロジーは問いです。(佐々木博)

一体誰が、どこで間違えたのか？

これをSDGsは問うています。(澁澤寿一)

ある意味、県北の方が先進ですね。(藤井裕也)

保存じゃなくて未来の都市計画をする。
今、間違いなく求められているのが、
地域を見直して町並みを「彫琢」する。
これは私が言った言葉ではありませんが、
美しく磨く、つていうことがこれからの地域でしょう。

(中村泰典)



高梁川流域学校

住所 〒710-0046 岡山県倉敷市中央2丁目13-3
電話番号 086-527-6248
FAX 086-691-2289
メールアドレス info@takahashigawa.or.jp
WEB <https://takahashigawa.or.jp/>

第1期の講座を収録した動画をご覧になりたい方や、今後の最新情報をご覧になりたい方は、「高梁川志塾」のウェブサイトをご覧ください。

[高梁川志塾](#)

検索



高梁川流域学校